

〔研究紹介&現地報告〕

調査報告：クダールのイスラーム宗教学校におけるフィールド調査

塩崎（久志本）裕子（東京外国語大学大学院）

本報告は、「イスラーム学習の変容とその社会的意味」という研究課題のもと、2006年3月から2年間の予定でマレーシア・クダール州の宗教中等学校(Sekolah Menengah Agama)を中心として行っているフィールドワークについてのものである。

1. 研究紹介

報告者がイスラームの学習に関心を持ったのは、ムスリムがイスラームをどのように学び、理解しているのかが、ムスリム社会の動態を理解する鍵と考えたためである。

人はムスリムの親のもとに生まれる、あるいはシャハーダ(信仰告白)をして入信することによってムスリムとなるが、イスラームをどのように理解し、それに基づいた意見や態度を持つようになるのかはそのあとの学習によって異なる。ムスリム社会を固定的、一枚岩的に捉える研究が批判にさらされるようになって以降、ムスリム社会で共有されている基本的信仰の唯一性を前提としつつも、一方で存在する解釈や実践のあり方の差異や多様性に着目するムスリム社会研究はむしろ主流になりつつある<sup>1</sup>。しかしその異なる実践のあり方が生まれてくるプロセスについて、対象となるムスリム社会においてイスラームに関するどのような知識がどのように共有されているのか、という点に着目して説明しようとしている研究はほとんど見られない。

報告者の研究は、ムスリム社会に共有されている知識の共通性と差異、そしてそれを成り立たせている社会的文脈について、学習の場の考察を通じて明らかにしようとするものである。「学習の場の考察」には、教育人類学と呼ばれる分野によくあるように学びのプロセスを綿密に考察するミクロ社会学的研究もありうるが、報告者はよりマクロな視点に関心を寄せている。イスラーム学習の場がどのように形成され、どのようなイスラームの知識が共有されるようになるのか、さらにそうした学習がどのような社会的意味を持つのかは、その社会における政治

---

<sup>1</sup> 先行研究に時代・地域を越えて普遍的なイスラームが、いかにして異なる社会的文脈において異なる実践をつむぎだすかを描いた多和田裕司『マレー・イスラームの人類学』（ナカニシヤ出版、2005年）が挙げられる。

経済的条件に強く影響されるためである。

例えば、現在 60 代以上の世代のイスラーム知識人は、ポンドックで学び、時にメッカなどで何年もかけて学んだイスラーム知識を地域社会の人々に教えていた。彼らは当然大学の学位などは持つことはなかったが、その知識と人格の両面において社会の尊敬を受け、生活に足るだけの喜捨を得て人々に教えていた。しかし現在活躍する 40 代前後のイスラーム知識人は、欧米や国内の大学のドクターを持ち、大学で教授などの地位を得、外車を乗り回すこともまれではない。初等・中等レベルの教師であれば、国内の大学の学士を取得したあとすぐに就職することができる。マハティール政権時代に顕著であったいわゆる「イスラーム化政策」によって、イスラーム行政及びイスラーム教育の機会が拡大された結果、今ではイスラームを学ぶことが雇用機会や社会上昇につながるという、かつてとは異なる意味を持つようになったのである。報告者の研究では、このような学ぶことの社会的意味についての考察を含んでイスラーム学習の変容を描こうとしている。

## 2. フィールド：ポンドックかつ宗教学校という場

上述の問題意識のもと、フィールドとして選んだのはクダー州にある一つのイスラーム宗教中等学校 (Sekolah Menengah Agama: SMA)、Madrasah an-Nahdzah である。調査地の中心を宗教学校におくのは、学校そのものの調査に集中するためというよりはむしろ、イスラーム学習の変容について地域、州、国家の各レベルで見わたすための拠点として適していると判断したためである。この学校の歴史は、古くからある宗教学校に典型的なものである。1936 年にポンドックとして始まり、1947 年に近代的学校の要素を取り入れたマドラサを併設した。次第に社会の要請に応じて、州政府の管轄の下、国家統一試験に向けたカリキュラムと各種宗教試験に向けた宗教学習カリキュラムを併せ持つ学校へと変化し、2005 年 6 月には連邦教育省が 100% 資金を出資する「政府補助宗教学校」となった。現在、フォーム 1 からフォーム 6 (下) までの男女生徒約 500 人が学んでいる。

この学校が面白いのは、行政的区分としては「宗教学校」であるにもかかわらず、同時に「ポンドック」としても認識されているという点である。現在の学校の校舎は鉄筋コンクリートの 3 階建てで、公道から見るとこの建物だけが見えて普通の学校となんら変わりはないのだが、実はこの校舎はポンドック地域の中にあり、裏には比較的小さな家が 50 軒ほど密集する小さな村が付属しているのである。ポンドックとは、よく知られているように一つの「小屋」をさす言葉であると同時にそれが集まった一つの地域を指す言葉である。こうした地域は、ワカフ(寄進)された土地にイスラームの学習にやってきた人々が集まって構成される村のようなものである。学習者自体は基本的に流動的な存在であるが、時間が経てばはじめの学習者の子や孫が住むようになる。先生の子どもが学習者になり、学習者

の子どもがやがて先生になる。「宗教学校」の部分はこのようなポンドック地域の中にあり、ポンドックの人々のつながりの中に生きているのである。

このため、クダーの人々はこの学校を、愛情をこめて「ポンドック・パッ・マン(Pondok Pak Man)」と呼ぶ。パッ・マンというのは創立者であるオスマンという名のトッグル(Tok Guru)<sup>2</sup>の愛称だ。学校には Sekolah Menengah Agama (SMA) Madrasah an-Nahdzah という正式な名前があるのだが、an-Nahdzah といっても通じず Pondok Pak Man というと「ああ、そのことか」と通じるということが多々ある。普通イスラーム教育史の概説では伝統的な教育機関はポンドックであり、それが近代的学校の形態を備えたマドラサになり、やがて州の管轄に入り宗教学校となった、という説明がされるが、上の例に明らかなように、行政上の区分は別として、人々の認識においては厳密に区別されてはいない。

この区別のあいまいさから、人々がイスラームを学ぶことをどのように意味付けているのかが見える事例を一つ示したい。宗教学校は一般に寮を備えており、この学校でも約70パーセントの生徒が校舎に隣接する鉄筋三階建ての寮に住んでいるのだが、10年ほど前までは、生徒たちも皆まさに「ポンドック」、つまり木製の小さな小屋に2,3人ずつ住んでいた。1980年代後半の最盛期には3000人近い生徒が集まり、現在校庭となっている学校の前後の空き地には無数の小屋が所狭しと建てられていたという。しかし1989年に自炊の火がもとで大火が発生したのを期に、鉄筋の学生寮と食堂が作られ、生徒の「ポンドック」は姿を消して普通の「全寮制学校」と変わらぬ姿になった。

ここで興味深いのは、この物理的変化を持って「ポンドックでなくなった」という人もいることである。つまり、ポンドックの独自性が、小さな木製の小屋という形状によって認識されているのだが、そこには形状以上の意味が込められている。それは、「親密さ」といってよいだろう。狭い小屋に2,3人で住み、寝食を共にするという「小屋内」の人間関係のみならず、「小屋間」についてもまた、一つの小屋は小さく、密集し、設備が整っていないので井戸やトイレを共有しなければいけない。そして、このお互いの生活がつながりあって暮らす空間に、一人のトッグルという長がいる。一人ひとり、礼拝をサボっていないか、禁止されたことをしていないか、トッグルの目は隅々まで届き、いわば何千人もの大所帯の父親のような役割を果たしていたのである。こうして、ポンドックは、単にそこで本に書かれた内容を学ぶだけでなく、トッグルの監視と指導の下にイスラームに沿った生き方を実践する、いわばモラル・コミュニティとして機能するのである。ポンドック／宗教学校での学びの意味は、こうしたコンテクストがあって初めて成立するものであり、使用されるテキストなどからみえる顕示的な学習内容だけでは測ることができない。そして、トッグルの死や物理的条件の変化な

---

<sup>2</sup> トッグル(Tok Guru)とは、イスラームを教えている先生の中でも尊敬されている先生に対する尊称で、ポンドックの長であることが多い。

ど、様々な要因によってこのコンテキストが変化するとき、イスラーム学習の意味もおのずと変化していく。

一方で、このようにして外観も教育内容もいわゆる「学校」と同様のものに変化していてもなお、ポンドックに根付いていた一つの大所帯のような感覚、イスラームを学び実践する護られた場という機能はいまだこの学校を特徴付け、この学校で学ぶことの意味の重要な部分を担っている。マレーシア社会に様々な変化が起こり、特に都市を中心とする若者のモラルの問題が顕在化するのと対照的に、イスラーム的生き方の見本としてのこのような古い宗教学校の社会的役割が明確に意識されているように思われる。このような意味で、この学校は今でもやはり「ポンドック」として認識されているのである。